

原発 ゼロ にむかって

2011年11月25日 No.4

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel: 03-5978-2741 fax: 03-5978-2865 mail: sien@tokyominiren.gr.jp

フクシマの今を共有して

11月5日、福島在住のフリージャーナリスト・福島県職員・飯館村長・福島中央テレビ社員・郡山市小学校教諭の5氏をパネリストに迎え、「被爆者の声をうけつぐ映画祭 2011」の特別シンポジウム『いま、フクシマは』が開催されました。

変わることが求められている

はじめに飯館村長から「お金の世界からいのちの世界へ」という基調講演がありました。小さな村の生き残り政策として、思いやりの政治“までー（真手）ライフ”スローライフの実践を積み重ねてきた中での原発事故。「私たち（フクシマ）が苦しむだけでは解決しない、大量生産大量消費の足し算の時代から引き算の時代へ。次世代へ手渡す世界は今より美しくあるべき、変わらねばやりきれない。」と。

被災者の選択に寄り添って

続いてのシンポジウムで特に印象的だったのが、子どもたちの現状です。外遊びができず室内で一日中過ごすストレス、情報不足による保護者間の意識差から子どもたちの中にもあきらめや分断が生まれ、また家族離散や家庭内不和などがあり、直接放射線の被害だけでなく影響が計り知れないということがよくわかりました。

またふるさとを離れての業務を余儀なくされている自治体が、困難の中にあっても放射線量の子ども基準値を設ける、除染マニュアルを作成する、内部被ばく量のWBC（ホルブ ディーカッター）検査を実施するなど独自の取り組みを行っていることや、市民自らが市内に放射能測定所を開所し、食品検査を行なうなど、困難にあきらめずに前に進んでいる自治体や市民の姿も知りました。飯館村長の村に残るという選択も、残らないという選択もそれぞれの判断に寄り添って、でも故郷につながってもらえるような取り組みをつくっていきたいという発言を聞き、私たちがフクシマの今を共有していくことの大切さを改めて実感しました。

（東京民医連事務局 村上絵理子）



6月以降の一時帰宅
1家庭あたり持参できるのがビニール袋1袋分だった。

藍原寛子氏（フリージャーナリスト）の資料より

放射線測定運動を目に見える取り組みに

東京保健生協の環境委員会では、この間2回の放射線量測定器の取り扱いの学習会を開催しています。

11月17日には大泉生協病院で行い、環境委員はじめ32人の練馬地域の支部組合員が参加しました。最初に



測定マニュアルDVDを視聴後、実際に機材を使って病院の周辺を測定してみました。計測の結果はどこも練馬区が設定している基準値以下でしたが、側溝や植え込みなどは若干値が高く出ることや、1箇所3点の高さを5回計測後の平均値を取ると1箇所につき15分もかかってしまうことなどがわかりました。

計測中に病院近隣の農家の方から敷地内の落ち葉が堆積している箇所を測ってほしいという声もかかり、測定運動を目に見えるかたちで広げていくことの意義も実感しました。今後は協議会を経て、組合の支部地域ごとに測る場所などを決め観測・データ収集を行い、来年3月には集まった情報をもとに交流集会をもつということが提案されました。参加者には後日測定認定証が送付されます。